

「言葉の力、十五枚の力」  
自身の経験を書いたのだろうと思われるもの、ゼロから小説世界を作り上げたもの、世相を皮肉ついたもの、アイディアから生まれたのだろうものなど、二十一編、じつにバラエティに富んでいた。原稿用紙十五枚というのはさほど多くないのに、たった十五枚で、こんなにも広がりのある世界を作ることができたのが、現在の自分の体験でできることや、現れたものだ。さらに、その小説から、何かしらの光景が立ち上がり、ありありと見えてくる。それが最も優秀作と佳作の七編は、みな、物語性を重視している作品だ。もしかして実際にあつた小説が、現れてきた。それでそれをそのまま書くのではなく、「小説として創り出されているものだ。さらに、その小説から、何かしらの光景が立ち上がり、ありありと見えてくる。それが最も優秀作と佳作の七編を選んだ。

## 広がりを感じた言葉の力 作家・角田 光代さん

『小説と作文の違いがわからなくて』小説をなかなか書き出せないでいた。その違いを知るために創作学科のある大学に進み、そこでようやく、つななとも小説といふものを書けるようになった。小説と作文の違いは、客觀と主觀の違いである。私が見聞きして、私が体验して、私が感じたことをそのまま書くと、作文あるいはエッセイになる。私が見聞きして体験して感じたことをもとに、私はない「私」を軸にして、その「私」から見える世界を作り上げるといふことは、実際にこの現実で達成されたものよりも、強くうつづく。長い間、読み手の心に残る場合もある。そんなことができるの

## 審査員講評

昨年のコンクールに比べると、応募数が約2倍に増加した。年代を見ると、中学生から、80代までの幅広い方が応募している。その作品内容も心情吐露的な作品から、空想的なものまで多岐にわたっていた。審査をするものの立場から言えば、これは難しいことはないが、現代詩というものは一般的な方々に、かなり受け入れられているのではないか、という錯覚も覚えた。

さて、応募作品のなかには、切実を感じるものや、深く自己の内面を見つめたものや、思ひ付かれたような言葉で、直截的に書かれたものが多く見受けられた。また、美辞麗句を弄したものや、思い付かれたような言葉が散見されたことは残念だった。その反面、自分の感情を庸常な見するということは、すなはち文化の発展にもつながる。詩の重要性、必要性はそんなところにあるのだ。言葉を産み出す楽しさとともに詩を考えてほしい。なによりも、既成の枠にとらわれない自分の言葉で語ることが、自分自身の成長にもつながる。今回の選考では、最も優秀作品の大いに悩んだ。残念だったが、最終的に該当作品なしという結論に至つた。佳作7編は、粒ぞろいの詩ばかりになった。惜しくも落選した方々のなかにも目を引く作品は多々あり、次回に期待したい。

## 既成の枠にとらわれず 詩人・金井 雄二さん

いつもも、気持ちをそのまま言葉に表すことなど、うまくできることではない。そのためには、自分の気持ちを別なもの、具体的な物に例えることが効果的。また、それを想像させるように書いていく。つまり直感、暗喩など、つた方法だ。その比喩が適切であれば、言葉は通常の意味を飛び越えたらばらられるのでないか、という錯覚も覚えた。

このデジタル時代に、各地で洗練された紙メディア（ローカルメディア）をつくり、人と地域のつながりを生み出している人たちが増えています。新聞社の活動にも、まちづくりに乗り出したり、地域の住民とともに防災プロジェクトに取り組んだりと、新しい展開がみられます。この秋、そんなローカルメディアや各地の新聞を、ニュースパーク（日本新聞博物館）で一挙公開します。

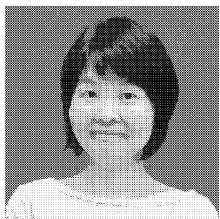
## 短編小説

### 「最優秀」

### 風の中でも生きる

村中 江利（中村 利江）さん

●川崎市高津区



むらなか・こうり  
(なかむら・りえ)  
1964年生まれ。横浜市出身。川崎育ち。  
明治学院大学法学部卒。団体職員。

「風の中」の続き  
書けて良かった

一昨年前「風の中」という作品を書いた時、いつかこの続きを書きたいと思っていた。それをまたこのよくなれたかな場に出させたいだけ、こんなに嬉しいことはありません。いつも私も支えてくれる家族、仲間、関係者の方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

佳作	〔敬称略〕
「褒められる人」	高橋美恵(57)
〔鶴見線〕	飯塚ひろみ(飯塚弘美)(67)
「タンカンの届け物」	倉坂尊子(62)
「細川邸の雨」	大里四郎(安藤亮)(77)
〔大坪園〕	II 横浜市多摩区
「虹のフルツ」	赤澤俊之(62)
〔バースデー・ショートツーリング〕	青木瑚海(青木絵利子)(41)
「タンカンの届け物」	倉坂尊子(62)
〔大坪園〕	II 横浜市多摩区

\*カッコ内は本名

## 現代詩

### ※最優秀該当なし

### 佳作

### 佳作

佳作	〔敬称略〕
「ペントボトル」	大和田宏樹(26)
「記憶と水、心」	国広知恵子(国広智恵子)(57)
「対峙する」	山口真喜(71)
「たぶん」	栗田向美(62)
「風にまかせて」	II 横浜市神奈川区
「せんたく日和」	金成悠樹(16)
「三日町」	大坪寛(51)
「鑑木恵子(60)	II 横浜市青葉区
「せんたく日和」	金成悠樹(16)
「風にまかせて」	II 横浜市神奈川区
「たぶん」	栗田向美(62)
「対峙する」	山口真喜(71)
「記憶と水、心」	国広知恵子(国広智恵子)(57)
「ペントボトル」	大和田宏樹(26)

### ◆11月16日に授賞式・講評会

授賞式は11月16日午後2時から、ニュースパーク（日本新聞博物館）イベントルーム（JR・横浜市営地下鉄関内駅徒歩10分または、みなとみらい線日本大通り駅3番出口直結）で。引き続き、両部門審査員を囲んでの講評会を行います。

授賞式・講評会は受賞者以外の方も無料で参加できます。希望者は往復はがきで、郵便番号231-8445（住所不要）神奈川新聞社文化部・文芸コンクール係へ申し込んでください（10月31日必着）。

## 地域の編集

### ローカルメディアの コミュニケーションデザイン



## 各地の紙メディアが集結

2019年10月5日(土)～12月22日(日)

ニュースパーク（日本新聞博物館）2階企画展示室

このデジタル時代に、各地で洗練された紙メディア（ローカルメディア）をつくり、人と地域のつながりを生み出している人たちが増えています。新聞社の活動にも、まちづくりに乗り出したり、地域の住民とともに防災プロジェクトに取り組んだりと、新しい展開がみられます。この秋、そんなローカルメディアや各地の新聞を、ニュースパーク（日本新聞博物館）で一挙公開します。

会期中は、ワークショップ「YOKOHAMA MEME by ニュースパーク」や各種イベントも開催します。詳細は特設サイト (<https://chiiki-henshu.com/>) をご参照ください。

開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日 月曜日（祝日・振替休日の場合は次の平日）

入館料 一般400円／大学生300円／高校生200円／中学生以下は無料

企画協力 影山裕樹氏（千十一編集室）

アートディレクション 尾原史和氏（ブートレグ）



●横浜市中区日本大通11、  
横浜情報文化センター  
☎045(661)2040  
㈹045(661)2029

●交通アクセス

►みなとみらい線「日本大通り駅」3番  
情文センター口直結、JR・横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩10分、横浜市営地下鉄「日本大通り駅」徒歩1分  
►首都高速「横浜公園出口」から約3分  
(横浜情報文化センター駐車場・日本大通り地下駐車場をご利用ください)

N  
ニュースパーク  
日本新聞博物館